



## 最後の定期考査に向けて

今日から後期中間考査一週間前である。

以前なら、考査一週間前ともなれば部活もなくなり、いよいよ…という感じで勉強の体制になっていただろうが、すでに受験に向けての準備が日常化している今は、逆に「考査一週間前？そんなの関係ねえ～」みたいな感じだろう。ただ、その「関係ねえ～」を「考査の準備なんて関係ねえ～」と考えているのだとしたら、ちょっとその考え方は改めて、しっかりと考査に向けた準備をしてほしい。なにせ、今度の考査は高校最後の考査であり、多くの人にとっては、人生最後の「定期考査」になるはずだからである。

\*

何事にも終わりはやってくるものだ。合唱祭も終わり、体育大会も終わり、そして、星陵祭も終わった。おそらく、人生で二度と合唱などしないという人もたくさんいるだろうし、ましてや、演劇をつくりあげるといった機会を体験をする人は（その方面に進まない限り）めったにいないだろう。今はその実感がなかなか沸かないかも知れないが、この3年間、日比谷で体験した多くのことは、これからの君たちの人生を大きく彩っていくに違いない。だから、私はこの通信を通して、いつか失われてしまうものを、失われる時になって後悔しなくてすむように、精一杯体験しておこうと伝えてきたつもりである。

もちろん、それと定期考査はレベルが違うかも知れないが、最後の体験であるという点では同じである。どうか、後悔することのないように、精一杯最後の考査を体験してほしいと願うのである。

もちろん、目の前の受験に向けて課題が山積しており、時間はいくらあっても足りないという思いを抱いているに違いない。しかし、日比谷の定期考査を甘く見ないことである。その準備は、直接受験の準備に結びつくことはもちろん、自分が見落としていることや、足もとの不安定なところを気がつかせてくれるきっかけにもなるはずだ。特に、国数英の勉強時間が相対的に低下している人にとっては、もう一度授業の内容を振り返り、副教材にもしっかり目を通すことが、国数英の完成にも結びついていくはずだ。

\*

前回の保護者会の時、「受験勉強に身を入れてから、自分がいかに何も知らないかに気づいて、勉強することが楽しくなってきた、と最近子どもが言っています」とおっしゃっていた方がいた。その場では何も言わなかったのだが、私はこの生徒は合格するだろうと思う。勉強とはそういうものだ。

例えば前回の現代文の授業の時、資本主義と社会主義、60年代と70年代を対比関係の基本とする文章の要約をやったが、あの文章の中では、テクノロジーと情報化が「他品種少量生産」を可能にし、その欲望を満たされる存在としての「消費者」という概念が「誕生」したことが指摘されていた。まさに現代の我々の状況を分析した文章といえよう。

イイ入試問題は、それを解く過程で私たちが成長させてくれる。そのことに気づいた上で勉強できているとしたら、もはや合格は目の前といってもいいのである。